

読者のページ

専業主婦たち

港南区 込宮 紀子

私は家事が嫌いだ(夫様スマセシ)。だから専業主婦と呼ばれる女性たちにもある種の偏見があった。ところが、広報区版の取材で出会った専業主婦の女性たちは、その偏見イメージをバリバリと破ってくれた。

彼女たちは、文庫、郷土史、人形劇など地域でいろいろな活動に熱中していた。

子育てを考える会のリーダーの女性の話。出産で仕事を辞めたとき、社会から取り残される不安があったという。しかし、この会に参加し、まわりの女性たちが子どものしつけから始まり、教育、夫婦、自分自身の生き方を考え始める姿を見て地域に

全日制市民として定着しながら社会と関わっていくこともできる、と思いだした。彼女は今、二DKの賃貸住宅の自宅を大人の文庫として開放し、地域のサロンにしたいと考えている。

また、保育ボランティア、PTA、文庫と八面六臂の活躍をしている女性の話。四十代の彼女は、今を自分自身の人間性の充満期と考えている。いろいろな経験をし、モノの見方を知り、六十代になったら電話相談のボランティアをやりたいという。彼女たちには、職場と自宅、

現役と定年といった区切りがない。全人格で、全エネルギーで社会と接している。その生き方は、組織で生きている人間から見ると新鮮で実にたくましい。

女性が仕事をもちつことイキイキと生きる見本のように言われたこともあったが、「何か」を追う専業主婦の彼女たちの方がずっとイキイキと生きているのかもしれない。だって仕事をもちつことは、確かにフトコロを肥やしてはくれるが、心まで肥やしてくれるとは限らないもの。彼女たちの生き方は「稼ぎ」の心

配なしに好きなことに熱中できる賢くしたたかな生き方かも。

「民間派遣研修」雑感

金沢土木事務所 塩川 一

私は企業派遣研修を経験した一人であるが、そのなかで感じてきたことを述べてみたい。

よく言われることであるが、役所は住民サービスが目的であり、民間は利潤追求を目的としている。従って、同一レベルで一概にその是非を論じることはできない。確かにそうであるうし、私も同感である。だが、しかしである。本末転倒・枝葉末節の理論という気がしてならない。両者の目的は異なるのは事実であるが、そこまで至る経過については共通する部分が多々あるのではないだろうか。接合態度、事務・事業の機械化、合理化等々、民間を問わず行政においても当然あてはまる分野である。例えば、民間では電話応対の時、全社員が、送話口でお辞儀をしながら話しており電話は口先だけの仕事ではなく、心の姿勢に係るコミュニケーション」ということを再認識させられた。ま

た、服装等も非常に清潔であり、好感をもてた。以上のことは、取るに足らぬことかもしれないが行政においても相当のイメージアップになるはずである。

ところで、本市ではここ数年不祥事が後を絶たない。なぜだろうか。要は「甘えの構造」が根底にあるからではないだろうか。服務規律の乱れ(遅刻して

も減給にはならない、服装等に関してもさほどうるさくない)等々、今一度原点に戻り、「全体の奉仕者とは何であるか」「民間に比して遅れをとっているのは何故だろうか」考える必要があるのではないか。「民間活力の導入」「民間の知恵に学べ」と言われて久しいが、ハード面

△あとがき▽

「家族問題研究会」を三年にわたって行ってきた。今回の特集は、研究会で行った調査や議論の中からみえてきた、今、自治体行政に求められていると思われることを、行政現場の実践報告という形でご執筆頂いた。執筆者は、研究会のメンバー及び関連セクションの方々である

だけでなく、接遇態度等よりソフトな面を学べと言いたい。

本市では、来たるべき二十世紀へ向けて、今以上に職員の高質の向上が求められているところである。民間に学べではなく、民間の尖兵として、リーダーシップを発揮してゆかなければならない。不祥事などもつての外だと思ふ。

「調査季報」は職員が自由に意見を發表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字語五〇枚以内。都市科学研究室まで(電話六七一一二〇二九)。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

が、どの原稿もそれぞれの仕事の次のステップを見通す視点をもち大変心強いものを感じた。

しかし、質のよい仕事を進める上で、「人的体制」の充実を訴えている原稿が多く、対人的福祉サービスの展開が、「人」をぬきには語られないことを改めて痛感した。福祉行政大転換の折、熟読を願いたい。△中川▽